ミュージアム研究員紹介

渋川浩一准教授

渋川浩一

干潮時のミミズハゼ採集風景（撮影地：下田市）

石の下から現れたミミズハゼ
（撮影地：清水市・興津川河口）

大潮の干潮時、玉石が堆積した浜辺に座り込んで、ひとりもくもくと石をひっくりかえすアヤしい人がいたら、それは私かもしれません。気味わるがらず、声をかけてみてください。ミミズハゼを探していて…と、目を輝かせて話し始めたら、たぶんそれは私です。

ふじのくに地球環境史ミュージアムにて脊椎動物分野担当の研究員を務めさせていただいております、渋川浩一と申します。この4月に静岡に転入し、着任したばかりの、47歳の新人です。ご挨拶とともに、簡単に自己紹介させていただきます。

幼少の頃からとにかく生き物が大好きで、虫とりや魚すくいに明け暮れる日々を過ごしていました。幾冊もの図鑑をボロボロになるまで読み倒し、いつの間にか内容をすべて暗記してしまうような、そんな少年でした（NPOの皆さまの多くにも、身に覚えが…ありませんでしょうか？）。中高生の頃、琵琶湖・淀川水系周辺という日本産淡水魚の“メッカ”に住んでいたことから多様な魚の世界にのめりこみ、大学・大学院では魚類学を専攻、ハゼの仲間の分類や系統に関する研究に没頭していました。現在は、日本を含む東～東南アジアの河川や浅海域に生息する様々な魚類を研究対象としています。

魚類は、全世界の脊椎動物種の半数以上が含まれる一大生物群です。同時に、きわめて多くの分類学的問題をはらむグループでもあります。日本国内だけを見ても、学名や和名がなく、その存在さえ一般に認知されていない“未知種”扱いの魚類が、いまだ数多く残されています。これはなにも、深海や、深山幽谷に限った話ではありません。“未知種”は、人間活動の影響を受けやすい河口域や沿岸浅海域にも、少なからず存在します。環境の悪化とともに、気づかれぬまま姿を消してしまうものもいます。手遅れになる前になんとかしなければなりません。

静岡県も、その例外ではありません。たとえば近年、私は、冒頭でもふれたミミズハゼ類の調査のため、友人らとともに日本各地で採集を続けています。静岡県からも多数の種が得られていますが、その多くは、まだ名前のない“未知種”です。とくに沿岸の波打ち際や河口域における種多様性が著しく、塩分濃度や波あたりの強さ、底砂礫の大きさ等、微妙な環境の違いにより、たくみにすみ分けている様子が観察されます。ごく限られた地域や環境にしかみられない種も、少なくありません。ミミズハゼ類は、地域の特徴や固有性を具体化し、多様な微環境の重要性を伝える格好の素材となるでしょう。

静岡県は、多種多様な生き物と、それを育む豊かな自然環境に恵まれた地です。その魅力を世に伝え、次代に継承していけるよう、NPOの皆さまとともに様々な研究・教育活動を展開していきたいと思います。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。